

生涯にわたって 社会のいたるところで学ぶための方法序説

大きな言葉を、小さくほどいてみる【後編】

佐藤 克宏

提案：「地域活性化」や「協働・共創」という大きな言葉を、一度立ち止まってほどいてみませんか？

前号から続きます。

「協働・共創」も、ほどいてみる

「協働・共創」という言葉も社会教育ではよく交わされるのではないのでしょうか。

行政と住民の協働、学校と地域の協働、企業と自治体の共創、多様な主体による連携。どれも大切な言葉です。けれども、「一緒に何かをする」というだけでは、まだ少し大きすぎます。

誰と誰が、何を一緒に決め、何を一緒に実行するのか。どこまでを一緒に考え、どこからは役割を分けるのか。声の大きい人だけでなく、声になりにくい困りごとを持つ人がそこに入っているか。終わったあとに、一緒に振り返る場があるか。こうして分けて考えていくと、「協働・共創」は単なるきれいなス

ローガンではなく、設計すべきプロセスとして見えてきます。

(図4)

私も現場で感じていましたが、社会教育の場では、この「一緒に考える」プロセスそのものに大きな意味がありますよね。最初から完璧な計画を用意して「この通りに参加してください」と示すのではなく、まだ余白のある段階で「この言葉をどう受け止めますか」「皆さんなら、どこから始めますか」と問いかけてみる。

そのとき、参加者は単なる受け手ではなくなります。自分の経験や実感を持ち寄りながら、その場を一緒につくる人になるでしょう。私は、ここに社会教育らしい発想のタネがあるのではないかと思っています。

人口減少を「課題」で止めない

もう一つ、「人口減少」という言葉についても考えてみたいと思います。

人口減少は、全国の多くの地域にとって避けて通れないテーマです。角田市も例外ではありません。ただ、「人口減少が課題です」と言った瞬間に、私たちの発想はどうしても「どうやって人口を増やすか」に向かいます。移住者を増やす、出生数を増やす、若者に戻ってきてもらう。もちろん、それらは大切な視点です。

しかし、探究の視点で見ると、もう少し丁寧なほどくことができます。若者はなぜ卒業を機に地域を離れるのか。進学や就職の選択肢が限られているからなのか、地域の魅力を知る機会がないまま大人になっているからなのか、それとも戻りたいと思っても働き方や暮らし方の選択肢が見えにくいからなのか。あるいは、人口が減ること自体を完全に止めるのではなく、それを前提にして地域の活動や学びの場をどう持続可能な形に変えていくか、という問いもありま



す。

「人口減少」という一つの言葉の中には、いくつもの問いが含まれています。その問いを分けていくことで、初めて次の小さな一歩が見えてくるのだと思います。

います。

伴走とは、言葉になる前のものに寄り添うこと

冒頭で少し触れた「伴走」という言葉について、もう少しし

寧に考えてみたいと思います。

伴走とは、ただ横について応援することだけではなく、相手の中にある、まだうまく言葉になっていない違和感や願いに寄り添うこと。

「何となく困っている」「何となく変えたい」「でも、どこから手をつければいいか分からない」という状態を、一緒に言葉にしていこう。そして、言葉になったものを、次の小さな行動へとつなげていくこと。

これは、学習者に対して、地域活動に関わる人に対しても、市民の方に対しても同じです。

「地域を良くしたい」という思いを、いきなり大きな事業にする必要はない。まずは、「誰の、どんな困りごとに、どんな変化が起きたらうれしいのか」を考えてみる。「協働したい」という思いも、いきなり大きな連携の仕組みにする必要はない。まずは、「一緒に考えたい相手は誰か」「その人は何に困っているのか」「お互いに持ち寄れるものは何か」を考えてみる。

大きな言葉を、小さくほどく。小さくほどいた言葉を、小さな行動につなげる。その積み重ねが、結果として地域や学びの場

を変えていくのではないかと思います。そして、この積み重ねに寄り添い続けることこそが、私にとつての伴走です。

言葉を問い直すことから始まる

私たちは、便利な言葉をたくさん持っています。地域活性化。人口減少。協働。共創。コミュニケーション。ウェルビーイング。持続可能性。どれも大切な言葉です。けれども、だからこそ一度立ち止まって考えてみる。

その言葉で、何を見ようとしているのか。逆に、その言葉によって、何を見落としているのか。誰の実感に近い言葉なのか。遠い言葉に感じてしまう人はいないか。

当たり前に使っている言葉を問い直し、もう一度みんなで見つめ直すこと。そこから、思いがけない発想のタネが生まれるのではないのでしょうか。

簡単なことや当たり前のことほど深く。難しいことほどシン

ブルに。そして、大きな言葉ほど、小さくほどいてみる。

社会教育の現場には、そのための対話の場がたくさんあります。いろいろな世代がいて、いろいろな経験があり、同じ言葉を聞いても、少しずつ違う受け止め方をする人たちがいます。

その違いを面倒なものとして片づけるのではなく、発想のタネとして扱ってみる。言葉をそろえる前に、言葉の中身を一緒に確かめてみる。

そんな小さな営みの中に、これからの社会教育や生涯学習の大事な役割があるのではないかと感じています。

次号の「発想する！授業」は中央区安西さんからお送りする予定です。お楽しみにください。

宮城県角田市総務部DX推進室
DX推進係

佐藤克宏

連絡先：tasing0123@gmail.com



**サステナブルタウン
SUSTAINABLE TOWN**

ワークショップのプロが選ぶ、その理由。

